

7月27日（月）サムエル記第二23章3, 4節

「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者」（3節）

3節でダビデは、「イスラエルの神は仰せられた。」「イスラエルの岩は私に語られた。」と、主が自分に語られたことをここで証ししています。22章3節にも「身を避ける、わが岩なる主よ」とありますように、ダビデ自身にとって主は身を避ける岩でしたが、イスラエルの民にとっても主は「イスラエルの岩」となられて、信仰をもって主に身を避ける者を守ってくださったのです。

「義をもって人を治める者」は、「神を恐れて治める者」であると言えます。もし私たちが神を恐れて日々歩むなら、私たちは神の義をもって行動することができ、それが目に見えない神を証しすることにつながります。そのようにして主を日々証しする者でありたいと思わされます。

さらに4節を見ますと、「その者は、太陽が昇る朝の光、雲一つない朝の光のようだ。雨の後に、地の若草を照らす光のようだ。」と例えられています。ジョイス・ボールドウインという旧約学者が、ここに挙げられている三つの比喻は、植物の生長に欠かせないものであり、これらなしでは生命はあっという間に死滅してしまうと言いました。つまり、国家を健全に保つためにも「義をもって人を治める者、神を恐れて歩む者」がどうしても必要であるということです。多くの為政者が、神を恐れず、むしろ自分を神として歩んでいるのではないかと思うほどに、人民に対して欲しいままにふるまっている姿を見ることがあります。その傾向は、世の終わりに向かってますます強くなっていくことでしょう。獣は竜によって大きな権威を与えられ（ヨハネの黙示録13章2節）全地は獣に従い、竜を拝むようになります。（ヨハネの黙示録13章4節）偽預言者（＝別の獣）は。獣を礼拝の対象とし、人々はそれを拝むようになります（ヨハネの黙示録13章11～15節）しかし「あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります」と言われています。（ヨハネの黙示録17章8節）それは、「地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時」であり、（ヨハネの黙示録11章18節）それは、「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった」とありますように（ヨハネの黙示録11章15節）キリストが地を完全にご自分のものとされ、永遠まで支配される時が来るからです。（ヨハネの黙示録11章15節）それは、まさにキリストがご自分の義をもって全地を支配される時であり、私たちはまさにそのようなかたちでの御国の完成を信仰をもって待ち望んでいるのです。いつかは滅びる世に希望を置くものではなく、永遠に続くキリストの支配される御国にこそ希望を置いて歩みましょう。

7月28日（火）サムエル記第二23章5～7節

「まことに私の家は、このように神とともにある。神が永遠の契約を私と立てられたからだ、」
(5節)

5節の「私の家」は、ダビデの王国、ダビデ王朝を指しています。それが神とともにあるとは、サムエル記第二7章13, 16節において、ナタンを通して神様が与えられた神の永遠の契約によりダビデの王国は神とともにある国として永遠に立てられることを意味しています。それは、昨日も記しましたが、世の終わりに向かって時代は暗くなっていきますが、神はご自分の民を「すべてのことにおいて備えられ、また守られる」からです。そしてダビデは、自分の信仰として「神は、私の救いと願いを、すべて育んでくださるではないか。」と言います。つまり、救いと願いは神の愛と真実と恵みによって、どんどん大きくなっていくということです。

6節では神とともにあるダビデの家とは対照的に「よこしまな者」が出てまいります。これはダビデに敵対する者たち、もっと言えば主に敵対する者たちのことで、それは「根こそぎにされた茨」に例えられています。「それらは手に取ることができない」とありますが、役に立たないで捨てられてしまう割には、やたらと攻撃的であることについて茨をたとえているのでしょう。7節の「彼ら」とはよこしまな者たちのことです。6節でも書きましたが、彼らはやたら攻撃的なので、剣の刃や槍で武装しなければならないのですが、結局はその場で火によって焼き尽くされてしまいます。最後は、主のさばきにより滅ぼされるということです。

ジョイス・ボールドウインが、ダビデは主のことばを思いめぐらしながら、最後のことばを語る時に、神に従うか、逆らうかによって人の定めがはっきりと分かれることを語っていると言いました。まさに主とともにあるものとして、永遠までも堅く立てられるか、それとも主の御前に何の役にも立たず、ただ火で焼き尽くされるように滅びてしまうのかで、私たちの永遠が決まってしまうます。少なくとも、私たちは人には永遠があることを知り、キリストにある救いを通して永遠のいのちを自分のものとすることができました。まさに救いと願いは、神により、神への信仰を通して私たちのうちで日々大きくされているでしょうか。私たちは、日々永遠に立てられる御国を待ち望む信仰があるでしょうか。

7月29日（水）サムエル記第二23章8～12節

「主はその日、大勝利をもたらされた。」(10節)

8節で三人の者がダビデの勇士たちということで名指しされています。ダビデは確かにすぐ

れた指揮官であり、王でしたが、彼一人の働きではイスラエルの国を治めることはできませんでした。どうしてもダビデの勇士と呼ばれる人たちの働きが必要であったということです。教会も牧師や一部の教会員だけの働きで維持されるものではなく、一人ひとりがなすべきことを行う中で、教会の働きが進められていくことをあらためて思われます。

最初は、補佐營のかしら、タハクモ二人ヨシェブ・バシェベテで、彼は槍を振るって一度に八百人を刺し殺したと紹介されています。二人目が、アホアハ人ドドの子エルアザルで、イスラエル人が退く数的不利な状況にあっても、なお彼は立ち上がり、自分の手が疲れて、手が剣にくつつくまでにペリシテ人を討ちました。三人目が、アラル人アゲの子シャンマで、彼もやはり兵がペリシテ人の前から逃げて、彼はそこに踏みとどまって畑を守り、ペリシテ人を討ちました。特に、エルアザルとシャンマにつきまして、私たちは二つのことを教えられます。まず一つ目が、主が大勝利をもたらされたということです。つまり、ペリシテに勝利できたのは、彼らだけの働きではなく、主がともに戦い、彼らに大勝利を与えてくださった結果だということです。二つ目が、イスラエルの兵が退くという不利な状況になっても、彼らはなおそこにとどまり続けました。それは、主が勝利を与えてくださるとの信仰があったからであり、主は彼らの信仰にこたえて大勝利を与えてくださったのです。私たちも周りが自分にとって不利な状況になりますと、非常に恐れます。しかし、そのように自分ではどうすることもできないとの無力さを感じる時こそ、主がともに働いてくださる時であり、主が働かれるなら私たちには必ず信仰による勝利が約束されていることを信じましょう。そして私たちは信仰による主の勇士として、主の御名によって信仰の戦いを雄々しく戦い、御国へとともに凱旋する者たちでありたいと思われます。

7月30日（木）サムエル記第二23章13～17節

「主よ。そんなことをするなど、私には絶対にできません。これは、いのちをかけて行って来た人たちの血ではありませんか。」（17節）

「三十人のうちのかしらのうちのこの三人」は、8～12節に名前が出てきた三人とは別人です。刈り入れのころ、アドラムの洞穴にいるダビデのところに彼らは下って来ました。ペリシテ人の一隊は、レフィアムの谷にいて、ペリシテ人の先陣はそのときベツレヘムにいました。ダビデは切に望んで、「だれかが私に、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらよいのだが。」と言いました。しかし、ペリシテ人の先陣はベツレヘムにいましたから、井戸の水を汲みに行くのは命がけのことでした。三人の勇士はペリシテ人の陣営を突き破って、ベツレヘ

ムの門から水を汲み、それをダビデのところに持って来て、彼の切なる願いに答えたのです。しかし、ダビデはそれを飲もうとせず、「これはいのちをかけて行って来た人たちの血だ」と言って、主の前に注いだのです。

私たちが自分の信仰の歩みを振り返ってみますと、何と要求の多い者だろうかと思わざるを得ません。むしろ、仕えられる者であるよりも仕える者として、人々の要求に答えることのできる者でありたいと思わされます。そして、この三人はいのちがけで、ダビデのために水を汲んで来ました。ダビデは、それを「いのちをかけて行って来た人たちの血」だと言いました。いのちをも惜しまず彼らはダビデのために水を汲みに行ったのです。イエス様は十字架上で私たちのすべての罪をその身に負い、苦しみ、血を流し、いのちを捨ててくださいました。イエス様は、私たちが罪から贖うためにいのちを犠牲としてくださったのです。そのイエス様を私たちが信仰をもって仰ぎ見るなら、私たちがイエス様のためにどんな犠牲を払ったとしても、仮にいのちを犠牲にしたとしても、その犠牲が大きすぎるということは決してありません。そして、世の人々はイエス様のために払った犠牲を愚かと思うかもしれませんが、主の目から見ればそれは尊い犠牲であり、主はいつまでも、それをおぼえていてくださいます。私たちも主のために何ができるでしょうか。主のために喜んで犠牲を払える者とさせていただきたいと思わされます。

7月31日（金）サムエル記第二23章23章18～23節

「彼は三十人の中で最も誉れが高かったので、彼らの長になったが、あの三人には及ばなかった。」（19節）

18節で紹介されているツェルヤの子ヨアブの兄弟アビシャイのことは、10章10、14節にも出てまいります。そしてアビシャイは、三十人のかしらでした。彼は槍を振るって三百人を刺し殺しました。20節にはエホヤダの子ベナヤが紹介されていて、「多くの手柄を立てた力ある人であった」と言われています。彼の活躍として、モアブの英雄二人を打ち殺したこと、雪の日に、洞穴の中に降りて行って雄獅子を打ち殺したこと、さらに堂々としたエジプト人のところへ下って行き、彼からその槍をもぎ取って、その槍で彼を打ち殺しました。これらのことにより、アビシャイと同様に、13～17節に出てまいります三勇士とともに名をあげました。

ここで私たちが気がつかされることは、この二人については「あの三人には及ばなかった」と記されていることです。別にこの二人を貶めようとしているということではないでしょう。

一体何が劣っているのかと思ってしまいます。このことについて思いめぐらしていた時に、いくつか大切なことを教えられました。まず一つが13～18節に出てまいります三勇士は名が記されていません。つまり、それほど周りからさまざまな誉れが与えられたとか武勲により名をあげて昇進したということでもないでしょう。そのような面で、主は彼らを高く評価しているのかもしれませんが。そしてもう一つが、三勇士は、ダビデのために命がけで水を汲みに行きました。ある意味、誰でもできそうなこと、取るに足らないと思えることに彼らは命をかけたのです。戦いに出ているのですから、アビシャイやベナヤのように戦いにおいて命がけで取り組む人は必ずいるはずです。しかし水を汲むことに命をかける人はいるでしょうか。しかし、主は取るに足らないと思えることに命がけで取り組む名もなき人たちにこそ目を留めます。もちろん、大きな働きをする人を主は目を留められないということではもちろんありませんが、取るに足らないことにも熱心に取り組む謙遜な名も知られない人を主は評価してくださる、すばらしい働きをしたと、主は称賛し、主は誉れを与えてくださるのです。そのことをおぼえて、私たちも主のために与えられた務めを謙遜に果たしてまいりたいと思わされます。

8月1日（土）サムエル記第二23章24～39悦

「ヒッタイト人ウリヤ。」（39節）

18節で「三十人のかしら」とありますが、24～39節に30人が記されています。まず24節で「ベツレヘム出身」とあり、ヨアブの兄弟アサエルとエルハナン、ハロデ人シャンマとエリカ。ペレテ人ヘレツ、テコア人イラ、アナトテ人アビエゼルとフシャ人メブナイアホアハ人ツアルモン、ネトファ人マフライ、ネトファ人ヘレブ。そして「ベニヤミン出身」の勇士たちが、ギブア出身のイタイ、ピルアトン人ベナヤ、ガアシュの出であるヒダイ、アルバト人アビ・アルボン、バルフム人アズマウエテ、シャルビム人エルヤフバとヨナタン。そして33～35節はユダの南部の出身者です。ハラル人シャンマ、アラル人アヒアム、マアカ人エリファレテとギロ人エリアム、カルメル人ヘツライ、アラブ人パアライ。そして36～39節は外国の傭兵です。ツォバ出身のイグアル、ガド人バニ、アンモン人ツエレク、ベエロテ人ナフライ、エテル人イラとガレブ、ヒッタイト人ウリヤです。ここを見ますと、30人がそれぞれ、さまざまな部族や地域から勇士として加わっていたことが分かります。出身や背景が異なっても、何の差別や偏見もなくダビデが登用したことが分かります。私たちも性差、出身地、学歴、職歴、家族構成など、ありとあらゆるものが異なる者同士が主の召しと選びによって、この教会に集められ、ともに同じ主を礼拝し、ともに祈り、交わりをなし、御国の福音を宣べ伝えています。

それはひとえに主の栄光を現すということと神の御国の前進のためという同じ目的のためです。このような多様性を持っている私たちが聖霊によって一つとされていることは感謝です。しばしば私たちの一致を乱そうとする力も働きますが、主に守られますよう祈ってまいりましょう。39節にヒッタイト人ウリヤの名が出てくことに私たちは驚かされます。彼も三十人の勇士の一人として数えられていましたが、ダビデがバテシェバとの姦淫の罪を隠ぺいするために、戦いの激しい戦場にあえて送られ、そこで戦死することとなりました。本来であれば、イスラエルの歴史の汚点となるようなウリヤの名は出さないものですが、聖書はあえてウリヤの名を書き記すことで、ダビデの罪を明らかにするとともに、心からの悔い改めにより彼の罪が赦されたことも明らかにしています。決して華々しい勝利のみではなく、罪をも明らかにする中で、主はそのようなダビデに対してもあわれみ深く、また恵み深くあってください、主ご自身がダビデに勝利を与え、恵みとして彼の王国を確立してくださったのです。教会の歩みも決して完全ではありませんし、罪も垣間見える中で、主は見捨てることなく、あわれみと真実をもって守り導き、支えてくださることに心から感謝をしたいと思わされます。

8月2日（日）サムエル記第二24章1～4節

「さあ、イスラエルとユダの人口を数えよ」（1節）

1節に「さて、再び主の怒りがイスラエルに対して燃え上がり」とありますが、再びとありますが、前の主の怒りは何だったのかということや今度は何に対して主が怒りを燃やされたのかは分かりません。そして「ダビデをそそのかして」とありますが。これは主の怒りがダビデに人口調査をするようにさせた。つまり、この人口調査の動機は、イスラエルに対して燃え上がった主の怒りであったということです。人口調査は本来徴税と軍隊組織の編成のためになされるもので、他国においては何の問題もないのですが、ダビデ自身が富と軍事力を神ではなく、自らが統制しようとすることは神に対する高慢であり、神の目には悪として映っていました。まさに、このことは神の主権への挑戦であり、神に対する不服従と信仰の欠けをも現すものでした。

3節でヨアブはダビデの人口調査に反対しようとしませんが、4節で「しかしヨアブと軍の高官たちへの王のことばは激しかった」とありますので、全く聞く耳を持たず、激しく彼らを叱責したのでしょう。私たちは、お互いに罪や過ちを指摘し合い、それをともに受け入れるような関係を築いてまいりたいと思わされます。私たちは、教会の中になるべく波風を立てたくないとの思いから、周りの兄弟姉妹の言動に問題を感じつつも、口をつぐんでしまうことがあります。

ますが、それは決して愛ではありませんし、そのような関係によって築かれた交わりは決して主が喜ばれるものではありません。私たちは、人からの意見を素直に聞ける信仰を持ち合わせたいと思わされますし、罪を示されたなら、それをすぐに悔い改める謙遜さも主によって与えられたいと思わされます。